

# 「館山まるごと博物館」の取り組み

— 授業づくりから地域づくりへ —

池田恵美子（NPO 法人安房文化遺産フォーラム）

【キーワード】NPO, 市民協働, エコミュージアム, まちづくり, 戦跡, 平和学習

## 1. 足もとの地域から世界をみる

私たちは、教育支援と地域活性化を旨とし、2004年にNPO法人安房文化遺産フォーラム（NPOフォーラムと略）を設立した。地域全体の自然や歴史文化遺産を「館山まるごと博物館」と捉え、市民が主役のエコミュージアム活動に取り組んできた。具体的には、平和学習や総合学習のスタディツアーガイド、講演、調査研究、書籍発行、まちづくり活動をはじめ、多様な団体のコーディネート役も果たしている。



図1 「館山まるごと博物館」

NPO活動の原点は、高校の世界史教諭であった愛沢伸雄代表の授業づくりにある。教材づくりのための調査研究は、文化財保存運動に繋がりと、地域住民や全国の研究者などとの多様な連携と協働を図ってきた。また、足もとの地域教材を活かした教育実践は、広く社会に開かれた眼を養い、生徒の主体性を育んだ。愛沢氏は「授業づくりと地域づくりの手法は同じ」と言い、今のNPO活動に続いている。

本レポートでは、教育現場から多岐にわたる連携・協働を実現してきた30年におよぶ実例の一端を紹介したい。

## 2. かにた婦人の村

1989年、社会科教員研修の一環として、愛沢氏は館山市内にある婦人保護施設「かにた婦人の村（かにた村と略）」を訪問した。売春防止法の制定に伴い、障害をもち生活困難な女性たちの救済を旨として、1965年にキリスト教の深津文雄牧師が開設したコロニーである。

ここは、「128高地」と呼ばれた旧海軍跡地を払い下げていたため、敷地内の中腹には、本土決戦に備えた地下壕跡があった。内部には、「戦闘指揮所」「作戦室」と刻まれたコンクリート製の額や、天井に彫られた巨大な龍のレリーフなどが生々しく残っている。

さらに丘上には、天を指すような形の石碑があり、「噫従軍慰安婦」と刻まれている。世界で初めて、日本人で唯一人、従軍慰安婦体験を告白した「城田すず子（仮名）」さんの証言を受け、1986年に建てられた鎮魂碑である。

この訪問が契機となって、深津牧師の聞き取りと戦争遺跡（戦跡と略）の調査研究が始まり、地域教材を活かした授業実践が生まれた。

当時、勤務していた県立安房南高校は女子校であった。愛沢実践は、いわゆる従軍慰安婦問題を扱うのではなく、かにた村というコミュニティの存在や、戦争で傷ついた女性の生き様に焦点をあてた。女生徒たちは、授業を通して自分たちにできることを模索し始め、かにた村のボランティア活動に取り組むこととした。学校と福祉施設の連携にとどまらず、国際協力にも繋がっていったことは特筆に値する（後述）。

## 3. 戦争遺跡の保存運動

太平洋に突き出て東京湾口部にあたる館山は、幕末から台場が置かれ、明治期から東京湾要塞地帯となって様々な軍事施設が開かれた。加害の一翼を担う訓練地となり、住民を巻き込む本土決戦の防衛体制を経て、敗戦直後には本土唯一「4日間」の直接軍政が敷かれた。

それまで語られていなかった世界的な出来事は、愛沢氏の調査研究によって明らかにされ、市民の貴重な証言が得られるようになった。なかでも、館山海軍航空基地に付属する地下施設「赤山地下壕」は、日米開戦前から建設が始まったという証言もある。戦跡を掘りおこし、地域教材とした授業実践は、千葉県歴史教育者協議会（歴教教と略）を通じて報告するとともに、安房集会で戦跡フィールドワークをおこなっている。各支部でも戦跡調査が進められ、共著で『千葉県の戦争遺跡をあらく』を編纂した。

「学徒動員 50 年」や「戦後 50 年」の節目には、それぞれ教員仲間や市民に呼びかけて実行委員会を組織し、戦跡を紹介する展示会やフィールドワークを実施した。NHK や新聞などの報道を契機として館山の戦跡は注目され、首都圏の学校や諸団体の平和学習ツアーが来訪するようになり、愛沢氏のガイド活動が始まった。

1996 年、世界遺産をみざした広島原爆ドームの国史跡化を機に、文化財保護法が改正され、戦跡が近代の文化財として認められるようになった。同年には戦争遺跡保存全国ネットワークが発足し、全国的な連携が始まった。

さらに公民館講座の講師となって戦跡めぐりが企画された。ここから戦跡調査保存サークルが発足し、市民ガイドが誕生していった。こうした市民活動が活発になると、地元自治体は戦跡の悉皆調査や活用に関する研究に取り組みはじめた。その報告書には、下表のとおり、評価の高い戦跡が多いことが記されている。館山市は、戦跡活用の目標像として「館山歴史公園都市～オープンエアーミュージアム」を掲げるとともに、平和学習拠点として赤山地下壕跡を整備し、2004 年に一般公開をはじめた。

表 1 評価別にみた館山市の戦跡の状況

A ランク（近代史を理解するうえで 欠くことのできない史跡）	18
B ランク（特に重要な史跡）	13
C ランク（その他）	16
合計	47

2004 年、NPO フォーラムが現地事務局となり、市と共催で第 8 回戦争遺跡保存全国シンポジウム館山大会を開催、翌 2005 年に赤山地下壕跡は市指定史跡となった。2015 年にも再び第 19 回大会を開催している。こうして館山は

平和学習の地として知られるようになった。

#### 4. 里見氏稲村城跡の保存運動

『南総里見八犬伝』のモデルとなった房総里見氏が実在していたことはあまり知られていない。上野国里見郷を出自とし、15 世紀半ばから 170 年も安房国を治め、1614 年の改易後は伯耆国へ転封された。

狭い半島先端部の安房地域には、今なお多くの城跡群がコンパクトに存在する。そのひとつ、稲村城跡に館山市の市道建設が計画されたのは 1996 年であった。戦跡保存運動と並行して、市民団体「里見氏稲村城跡を保存する会（稲村保存会と略）」が設立された。愛沢氏が代表を務め、千葉県城郭研究会や文化財保存全国協議会などと広く連携を図った。

市民ガイドによる城跡めぐりや古道ウォーキング、研究者による講演会やシンポジウムなどを開催しながら、稲村城跡保存への世論を高めていった。署名も全国から 1 万筆集まった。2000 年には市道計画が凍結され、自治体も史跡化に向けて方針を転換した。

稲村保存会では、群馬県榛名町長や鳥取県倉吉市長・関金町長を招聘し、千葉県知事・館山市長らとともに一堂に会する「里見サミット」を開催し、稲村城跡の価値を全国的に周知していった。17 年の保存運動が実り、2012 年、稲村城跡は南房総市の岡本城跡とともに、里見氏城跡群として国史跡に指定された。

目的を達した稲村保存会は同年に発展的解散し、協働してきた NPO フォーラムにその後の活動は託された。

#### 5. 青木繁「海の幸」記念館・小谷家住宅

1904 年、洋画家青木繁は友人らと布良という漁村を訪れ、小谷喜録宅にひと夏滞在し、重要文化財『海の幸』を制作した。

明治期の布良はマグロはえ縄漁でたいへん栄えていたが、漁具の近代化や温暖化の影響で水産業は衰退し、高齢過疎が深刻となっていた。小学校の統廃合や地区の将来を心配した区長らは愛沢氏を訪ね、地域活性化に力を貸してほしいと懇請した。これを受けて NPO フォーラムは富崎地区コミュニティ委員会と協働し、2005 年から青木繁「海の幸」を活かしたまちづくりに取り組み始め、住民の理解と参画を促した。

当主の意向を受け、小谷家住宅は館山市指定

有形文化財となり、管理団体として、2008年に青木繁《海の幸》誕生の家と記念碑を保存する会（青木保存会と略）を発足した。

一方、美術界においても、画家の聖地として小谷家住宅を残せないかと要望する声が多く、保存基金を募る目的で NPO 法人青木繁「海の幸」会（「海の幸」会と略）が全国の画家や美大関係者等により設立された。

ここに館山市が協働に加わり、保存プロジェクトが進められた。館山市ふるさと納税では「小谷家住宅の保存活用に関する事業」を指定して寄付できるようになった。四者で協議を重ね、諸団体やゆかりの地域へも呼びかけながら、3,600万円を集めた。



図3 館山市ふるさと納税（案内）

また、青木保存会の事務局を担う NPO フォーラムでは、文化庁の補助・委託事業を5年連続で受け、庭園整備や書画の表装などを市民のワークショップとして実施した。多様な団体との協働体制は高く評価され、2014年に千葉県知事より「コラボ大賞」を授与された。

こうして小谷家住宅は半解体の修復を経て、2016年に青木繁「海の幸」記念館として公開がはじまった。青木保存会では、コミュニティ委員会や布良崎神社役員らと協働しながら来訪者の案内や対応をおこなっている。目的を達した「海の幸」会は解散したが、記念館の「友の会」として全国の美術関係者や支援者らと広く連携を図り、記念館を運営している。

## 6. 旧安房南高校の木造校舎

関東大震災の教訓を得て、安房高等女学校は1930年に新築された。女子教育の殿堂にふさ

わしく、白鳥が羽を広げたような美しさで、随所にモダンな意匠が配置されている。

戦後の学制改革で安房南高校と改称され、RC造校舎に建て替えられた1980年頃、先見の明があった校長の英断により、旧第一校舎が管理棟として保存された。1995年に県指定有形文化財となったが、2008年に安房高校と統合され、安房南高校は創立100年の歴史を閉じた。

かつて同校の教員であった愛沢氏は、使用されないままの文化財校舎の経年劣化を憂慮し、元同僚の美術教諭や文化財建築専門家らとともに、卒業生や市民に広く呼びかけて、2018年に「安房高等女学校木造校舎を愛する会（愛する会と略）」を発足させた。

管理者である安房高校の許可を得て、草刈りや掃除などの環境整備をおこなっている。こうした活動が認められ、事務局である NPO フォーラムは、県教育委員会文化財課から一般公開事業を2018年より委託された。翌年からは定期的な校内巡視も委託に加わり、学校資料の整理とともに、教育史の調査研究に取り組んでいる。

2019年の房総半島台風の被災直後には、文化財建築や歴史資料の第一人者や一般ボランティアが各地から駆けつけ、大雨の中、屋根にあいた穴の補修や雨漏り対応に尽力した。

2020年には新型コロナウイルス感染症拡大に伴い公開事業が中止となったが、代替事業として文化財校舎を紹介する動画を制作した。千葉県のゆるキャラ「チーバくん」の出演や安房南高校演劇部によるナレーションなど、連携を図った。2021年も続くコロナ禍のため中止となり、代替事業としてオンライン講演会と写真パネル展を企画し、現在準備中である。



図4 旧安房南高校の紹介動画

なお、県立館山総合高校では県教委の「魅力ある学校づくり」の一環として、NPO フォーラムが委託を受け、「観光の学び」に取り組んでいる。戦跡や布良崎神社など「館山まるごと博



物館」をめぐるとともに、旧安房南高校の木造校舎を見学し、教室内で体験ワークショップを実施している。生徒たちからは、「かわいい校舎」「廊下がびかびかに輝いていて驚いた」「懐かしい雰囲気で気持ちが落ち着く」「この学校に通いたかった」などの感想が聞かれた。

### 7. ハングル四面石塔と日韓交流

大巖院という寺院にある「四面石塔」は、県指定有形文化財であり、東西南北の各面に印度梵字・中国篆字・和風漢字・朝鮮ハングルで「南無阿彌陀仏」と刻まれている。



図2 ハングル「四面石塔」

愛沢氏はこれを地域教材として、現代社会の授業に取り上げ、19 時間の調べ学習をおこなった。建立の 1624 年は、豊臣秀吉の朝鮮侵略から 33 年目にあたる年であり、拉致朝鮮人を帰還させる朝鮮通信使兼刷還事業の年でもあった。これにより、この石塔は戦没者供養と平和祈願がこめられたものであると推察される。

さらに、2002 年の日韓国民交流年には関係多方面に広く呼びかけ、在日韓国大使館や千葉県・館山市などの後援、日韓文化交流基金の助成を得て、日韓歴史交流や歴史教育交流シンポジウムなどを開催した。大巖院の境内では韓国の民族舞踊を披露し、市内のホテルを会場に韓国の研究者の講演等をおこなった。

また近年では、韓国京畿道が行政施策としてエコミュージアムに取り組んでおり、まちづくり視察に館山を来訪したり、私たちが韓国でのシンポジウムや講演に招かれている。

### 8. 渡米したアワビ漁師移民と日米交流

明治期に渡米した房総アワビ漁師らは、西海岸のモンレー湾域でアワビ事業に成功している。戦争を経てこの歴史は幕を閉じたが、「戦後 60 年」を機に、調査研究を進め、米国の歴史学者や市民との日米交流を開催した。当時の堂本暁子千葉県知事と米国歴史学者の英語対

談も企画し、県や市を巻き込んだ大きな取り組みとなり、今も続いている。

近年では、大正期に建築された関係者の旧宅を解体するにあたり、明治期の古文書が大量に見つかった。アワビ移民研究所との協働により、館山市立博物館の助言を得ながら、南房総まちづくり補助事業として研究チームを立ち上げ、くずし字解読やその歴史調査を進めている。

### 9. 高校生のウガンダ支援交流

前述した安房南高校では、かいた村への奉仕作業が契機となって、ウガンダ共和国の NGO ウガンダ意識向上協会のスチュアート・センパラ代表を紹介された。ウガンダは長引く内戦の影響で、エイズが蔓延して孤児が増え、教育もままならないという状況を知り、生徒会ボランティア委員会ではウガンダ支援活動に取り組むこととした。市内の企業やロータリークラブなどにも協力を呼びかけ、募金や文化祭のバザーをおこなった。1994 年から毎年、10 万円程度の支援金を送り続け、2000 年には職業訓練施設「安房南洋裁学校」が現地に開かれた。

安房南高校の統合を経て、県立安房高校 JRC (赤十字) 部に継承されたが、まもなく廃部となり、私立安房西高校 JRC 部が引き継いだ。バトンは 3 校にわたり、ウガンダ支援交流活動は 27 年目を迎えた。なかには二代にわたって活動に参加している母子もいるという。高校生だけではなく、NPO フォーラムが窓口となって、広く市民協働を展開している。

2005 年からは「安房・平和のための美術展」実行委員会や、館山病院感謝祭のバザーなどの市民活動がチャリティ連携を図っている。2018 年からは、10 月を「ウガンダコーヒー月間」とするキャンペーンに、喫茶店など 25 店舗が賛同し取り組んでいる。官民一体の連携・協働は、多くの人の夢を乗せ、とどまることがない。

### 【参考文献】

- 「戦争遺跡保存活用方策に関する調査研究」報告書 (館山市・地方自治研究機構刊、2005 年)
- 『足もとの地域から世界をみる－授業づくりから地域づくりへ』(NPO 法人南房総文化財・戦跡保存活用フォーラム刊、2005 年)
- 『ヘリテージまちづくりのあゆみ』(NPO 法人安房文化遺産フォーラム刊、2014 年)